
17才の叙情

F 喪ンリート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

17才の叙情

【Nコード】

N7183M

【作者名】

F喪ンリート

【あらすじ】

17才のある日、僕はある美少女に呼び出しを受けた。

（前書き）

初めまして、初投稿になります。
稚拙な文章ですが宜しくお願いいたします。

「クラス一緒になってからずっと吉永君のこと好きだったの」
きりりとした声が教室に響く。

「もちろん、よかつたらで良いんだけど・・・あたしと付きあつてくれない？」

僕の前に立っているのは、今年の春から一緒のクラスになった宮崎翔子さん。

ぱつちりとした瞳と透き通るような白い肌・・・・・・まあ、なんというか可愛いのだ。僕より5センチは高くて（これは彼女がスタイリッシュというだけで決して僕が小さいのではない・・・たぶん）ほっそりしてる彼女。妖精みたいだ。

そんな彼女がぼくになんと告白をしてきたのだ！

「ええつと・・・」

吃って声が出ない。

「ん？」

宮崎さんの瞳が僕を突き刺す。

正直、僕はどうすればいいのかわからなかった。宮崎さんが僕なんかは何で告白したか、だって、一度も話したことが無いんだから顔、普通。勉強、普通。そんな僕に美少女が告白してこようとは！というか彼女にはボーイフレンドがすでにいるはずじゃなかったっけか？うゝん、断る理由もないっちゃんないんだが・・・。

「ありがとう、びっくりしちゃってさ」

「そうね。ごめん、いきなり告っちゃうなんて驚きだよね？」

「そ、そんな宮崎さんがあやまる必要なんか全然ないよ、全然・・・」

彼女が一步前にでる。甘い柑橘系の香りが僕の鼻に届く。

「で、返事はど」

「あ、あのさあ！」

僕は彼女を遮る。しまった、声が裏返ってしまった。

「宮崎さんって彼氏いなかったっけ？」

「あー・・・もういいの！付き合って一カ月もたってなかったし、つまらないんだもん！まあ今まで付き合った男の中では長い方になるのかな。」

僕は改めて彼女を見つめる。

「でも、でもね、もう未練なんてないよっ！こんなのしょっちゅうだしね」

満面の笑顔を彼女は作る。

僕は思った、彼女は自身に満ちあふれている。「よかつたら・・・なんて言ってたけどホントは断られるわけないと思ってる。」

「えっと・・・何で好きになったの？僕のことを」

「なんでって・・・」

予想外の質問だったのだろうか？目をそらしてうつむいてしまった。

「悪いけど宮崎さん、君とは付き合えないよ」

「え？・・・」

「僕は今まで彼女なんていたことがないんだ、情けないけど。だから、恋愛なんてちっともわからない。でもね、女の子と付き合いたいって思いはあるんだよ、うん、その気持ちは人一倍強いかもしれない」

彼女は笑顔を必死で作ろうとしているが引きつっていた。

「意味・・・わかんないんだけど」

「彼女は欲しいんだ、凄く。でもね、僕は、なんというか・・・全力の恋がしたいんだ。二人がお互いを好きで、不器用でもなんでも良いから愛し合うような・・・」

僕は一回息を整える。

「宮崎さんは僕のこと何も知らないでしょう？僕も宮崎さんのこ

とをほとんど何も知らないよ。そんな僕たちが一緒になってもきつと上手くはいかない。少なくとも僕には自信がないよ。君を幸せにする自信が僕にはない」

宮崎さんは顔を真つ赤にさせたままずっと下をむいている。

「そんなの・・・ただの綺麗ごとじゃない」

「そうだね、確かに僕の」

「そんなの綺麗ごとじゃない!!」

彼女の大声に僕は立ちすくむ。

「馬鹿じゃない、そんなの。あたしだって全力の恋がしたいわよ！別に軽い気持ちでコクったわけじゃないんだから。人の気も知らないで！」

床に置いた自分の鞆をとって彼女は教室の扉に向かっていく。

「あの、ちよつと待って！」

「何よ！」

扉に手をかけていた宮崎さんが振り向く。

「告白、凄く、嬉しかった」

「・・・・・・」

「めちやくちゃ嬉しかった。もうそれはそれは言葉に出来ないくらいに本当に・・・」

「今更なに言っても無駄よ！大嫌い!!」

ビシャン！

扉を思いつきり閉じていつてしまった。

「ただの綺麗ごとじゃない!!」

ひとり教室に残された僕の耳にその言葉が反芻していた。

たしかに、その通りなんだろう。実際、真つ正面の恋なんてフィクションにしかありえないのかもしれない。皆、多少の妥協をもつて、あるいは、体裁をき気にしながら「恋」を扱っているのだろう。だけど、僕はその虚構への憧れを捨てることは出来ない。少なくとも今は。

一生懸命の恋がしたい。お互いを想うと胸が痛くなるような、いつまでも一緒にいたいと思うような、喋らなくてもわかりあえるような、お金とかエッチとかじゃなくてその人自身が愛おしくてたまらないような、そんな「恋」がしたい。

こんな自分をいつかは笑う自分がくるのだろうか？「アホぬかしてんじゃねーよ」って嘲けわらうようになるのだろうか？カッコイイ気もする。

そのときが来たら僕が大人になったときだろう。大人とはそのよくなものなんだ、良い悪いは抜きにして。はやく大人になりたいという気持ちもあるがちよっぴり怖い気もする。いつ、僕は「恋」を妥協して扱えるようになるだろうか？

そして、「恋」に幻想を抱いていた自分を羨ましがる日は来るのだろうか？その時の「僕」は一体、どんな「僕」になっているのだろうか？

（後書き）

ありがとうございました！

貴重な時間を割いて読んでいただいて嬉しく思います

一応、小説指南書等を読んだ後に書いてはみましたが・・・

今回は描写や日本語文法を鍛練するために投稿させていただきました。ストーリーは思いつきです。

では、さようなら！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7183m/>

17才の叙情

2010年10月15日21時05分発行